

大学生の童話療法における結末のあり方と気分変化との関連

熊野春菜¹・石田 弓²

Relation between the ending and the emotional change in a fairy tale in art-therapy on college students

Haruna Kumano and Yumi Ishida

This study implemented the method of fairy tales in art therapy on male college students. This method is a form of expressive psychotherapy conceptualized by Araragi in 2008 and is conducted via drawings and fabrications. The obtained data were then quantitatively examined to determine whether the same types of emotional changes take place with female college students, and also to examine the correlation between conclusions of the fairy tales (e.g., a happy or unhappy ending) and the emotional changes before and after the therapeutic implementation. The findings indicate that, for both male and female students, there was a reduction in the Depression (Anxiety) factor and the Boredom factor, and an increase in of the Liveliness factor and the Friendliness factor. Moreover, there was a significant difference among the four factors for the happy-ending group and among two factors for the unhappy ending group. However, the emotional change in the Friendliness factor due to differences in the ending was only seen in the male group.

Key words: fairy tale in art-therapy, emotional change, ending

問題と目的

童話療法とは、蘭（2008a）によって考案された、描画と物語によって童話を作成する芸術療法の1つである。クレヨンやサインペンなどを用いて画用紙に絵を描き、文章を書いて童話を作成していくというものである。蘭（2008a）によると、童話療法とは、(1) 関係づくり（主人公、脇役、背景の関係の更新）を楽しみ、自分の心の世界を拓け柔軟にする、(2) 物語と描画によるストーリー（起承転結）の表現原理を土台とする、(3) イメージ自立を目指す（アニミズムの心理でパワーアップしていく想像遊びのなかで、主体感覚を活性化していく）の3つの特徴を持った心理療法であり、意識（文章）と無意識（描画）の統合による人格統合、自分を主人公として主体的に関係づけていく世界を、心の核として育てることを目標としているという。

¹ 広島大学大学院教育学研究科

² 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター

また、蘭(2008a)は童話療法の特性として、(1) 童話という構成に内在する効果、(2) 自分に内在する気がかり、こだわり、不思議、感動などを見つけ、焦点化して起承転結へと物語を作成する問題解決法、心的事象の了解法、(3) アニミズムがもつエネルギーを活用し、動物や植物がもつエネルギーを借りて、処理できなかった問題を解決していく、(4) 童話作成という媒体がもつ治療者－クライアント関係の緩衝効果、(5) 描画における色づけや形づくりがもたらすカタルシス効果、癒しの効果、(6) テーマがもつ響きの効果の6つを挙げている。

さらに、蘭(2008a)は童話療法の成立背景として、以下の7つを挙げている。(1) 童話の心理臨牀的(集合的無意識、象徴の解釈)視点、(2) 表現療法(無意識がもつ治癒力)としての視点、(3) 物語がもつ心理療法(関係構築)の視点、(4) アニミズムの心理(自己中心性がもつ強さ)がもつ特質の視点、(5) 移行関係(自己慰め、自己癒し)の視点、(6) 描画療法(中間領域がもつ癒しと創造)の特質の視点、(7) イメージ自立(体験過程での主体感覚の賦活化)の視点である。

そして、蘭(2008a)は、童話作成において発達援助としての童話課題を定めることを勧めている。基礎的課題として、「水(海)の生きものの童話」を挙げており、このテーマには無意識の衝動が多く表れ、水の中で浄化・再生される意味を持つという。また、水の中は居心地の良い母性に守られた保護された空間であり、早期の母子関係を示す象徴的なものでもあるため、なるべくこの課題は選んだほうがよいと述べている。

蘭(2007)は女子大学院生19名に対し童話療法を実施し、童話作成への心的構えと感情、童話内容、作成後の内省感情について調査した。その結果、作成前の不快感が作成後、快感情に変化した割合は78%であった。また、作成の着手時の内省感情に注目し安定型(動揺なく前向き)、アンビバレント型(不安と楽しみなどの葛藤がみられるタイプ)、不安・憂うつ型(大変だ、憂うつ、戸惑い、嫌、めんどくさい)の3パターンに分類したところ、安定型(3作品)の童話には「起承転結」があり、テーマが明確にあり、前向きで社会適応的であった。特に展開においてドラマチックであり、またそこで気づきや新しい獲得がなされていた。アンビバレント型(5作品)では、課題遂行の不安と好奇心が葛藤しており、「転」で気づき、創造的志向ができる「結」でハッピーエンドになり満足につながった。不安・憂うつ型(11作品)では、「転」で自己成長感や充実感が得られると満足に、しかし、ハッピーエンドでも元に戻ってしまうと不満足につながった。

また、蘭(2008b)は女子大学生53名に童話療法を実施し、童話作成前、物語文のみ作成後、童話作成完了後のそれぞれの段階における感情変化について調査を行なった。その結果、物語文のみ作成後において新鮮さ、想像力、躍動感がやや上昇したものの、快適さや理解に関してはやや減少した。童話作成後では、疲労感、不安、憂い以外の感情はすべて上昇したという。また、蘭(2008b)はこの研究の中で、童話作成に内在する心理機能を検討するため、感情評定尺度について因子分析を行った。その結果5つの因子が抽出され、童話療法は、斬新さ、自己充足、不満、疲労感、作業完成・理解統合の5つの感情変化をもたらすと考えられる。

蘭(2007, 2008b)によって童話療法が女子大学生の感情状態に影響をもたらすことが示されているが、童話療法に関する研究の中で量的に検討されたものはまだ少ない。そこで本研究では、男子大学生にも童話療法を実施し、女子大学生同様に感情変容効果が生じるかを量的に検討することを

第1の目的とする。また、蘭（2007）より、結末のあり方が童話作成後の感情に影響を及ぼすことが示唆されていることから、実施前後の感情変化と結末のあり方との関連を見ていくことを第2の目的とする。

なお、本研究では寺崎・岸本・古賀（1991）によって作成された多面的感情状態尺度（Multiple Mood Scale：以下 MMS）短縮版を用いた。状態的な感情を測るために作成された尺度であり、心理療法などによる感情変化を測定するためにも用いられている。また、否定的感情状態として3感情状態（抑うつ・不安、敵意、倦怠）、肯定的感情状態として3感情状態（活動的快、非活動的快、親和）、中立感情状態として2感情状態（集中、驚愕）と、8つの感情状態について多面的に測定することができる（古賀・寺崎・岸本，1991）。なお、集中、抑うつ・不安、活動的快、倦怠、敵意、親和、非活動的快はそれぞれ、Lebo（1978）の見出した感情状態の、concentration, depression, energy, fatigue, hostility-aggression, social-affection, well being に対応しているという（寺崎・岸本・古賀，1992）。

方法

参加者 大学生 60 名（男性 28 名，女性 32 名），平均年齢 20.8 歳（SD=1.15）であった。

実験計画 2（時期：実施前，実施後）×2（結末：ハッピーエンド，それ以外）×2（性別：男性，女性）の3要因計画で行なった。

用具 A4 画用紙 4 枚，クレヨン，サインペン，下書き用の鉛筆，消しゴムを用いた。

質問紙 MMS 短縮版（寺崎ら，1991）を用いた。抑うつ・不安，敵意，倦怠，活動的快，非活動的快，親和，集中，驚愕の8因子，各因子5項目の全40項目からなり，4件法で測定する尺度である。各因子の項目を Table 1 に示した。加えて，フェイス項目として性別，年齢，学年，学部をたずねた。

Table 1

多面的感情状態尺度・短縮版の各因子項目

否定的感情状態		肯定的感情状態		中立的感情状態	
因子名	項目	因子名	項目	因子名	項目
抑うつ・不安	不安な	活動的快	活気のある	集中	丁重な
	悩んでいる		気力にみちた		慎重な
	気がかりな		元気いっぱい		ていねいな
	自信がない		はつらつとし		注意深い
	くよくよした		陽気な		思慮深い
敵意	敵意のある	非活動的快	のんびりした	驚愕	びっくりした
	憎らしい		おっとりした		驚いた
	うらんだ		ゆっくりした		びっくりとした
	攻撃的な		のどかな		動揺した
	むっとした		のんきな		はっとした
倦怠	だるい	親和	恋しい		
	疲れた		いとおいしい		
	つまらない		好きな		
	退屈な		愛らしい		
	無気力な		すてきな		

童話のテーマ 蘭 (2008a) は、童話作成において童話課題を定めることを勧めているため、本研究では童話のテーマとして、基礎的課題である「水 (海) の生きものの童話」を設定した。

描画後の質問 (Post Drawings Interrogation : 以下 PDI) 作成された童話の物語に関して理解を深めるために以下のような PDI を行なった。結末のあり方と感情変化との関連を見るにあたり、結末がハッピーエンドであるか、非ハッピーエンドであるかは描いた本人の主観によると考えられるため、PDI でたずねた。PDI の内容は以下のとおりである。①主人公はだれですか、②作成した童話の起承転結について教えてください (起の場面について説明してください)、③この物語はハッピーエンドですか、バッドエンドですか、それとも、どちらでもないですか、④その他、調査に関して感想や意見がありましたらお願いします。

手続き 童話作成は個人面接の形式で行ない、作成時間は 1 時間を目安とした。作成開始前に質問紙に回答させ、その後、教示を行なった。教示は蘭 (2009) を参考にし、「これから童話を作成していただきます。童話のテーマは〈水 (海) のなかの生きもの〉です。原則として 4 枚の A4 画用紙を横にして文を縦書きにし、絵を描いて、起承転結のある童話を作成してください。原則です。描きたくない場合や文が浮かばないなどの場合は自由に描いてかまいません。およそ 1 時間の中で起承転結を持って水 (海) のなかの生きものの童話を作ってください」とした。童話作成後に再度質問紙に回答させ、その後、PDI を行なった。

結果

結末の分類 童話の結末の種類については、PDI での参加者の回答で「ハッピーエンド」と報告されたものをハッピーエンド群、「バッドエンド」もしくは「どちらでもない」と報告されたものを非ハッピーエンド群とした (Table 2)。両群の童話例を Figure 1, 2 に示した。

Figure 1 に示したハッピーエンドの童話の主人公は、「タコくんとウニくん」である。起承転結の「起」となる 1 枚目 (左上) では主人公である「タコくんとウニくんは仲良しであること」が描かれている。加えて、「最近タコくんには気になっていることがある」というように 2 枚目への布石となっている。次に 2 枚目 (右上) において主人公の 1 人である「タコくん」が気になっている内容について説明されている。「転」となる 3 枚目 (左下) で、「タコくんが勇気を出してウニくんに聞いてみる」と、4 枚目 (右下) において「お互いの気持ちがわかったため仲直り」ができ、ハッピーエンドの結末となった。また、PDI での参加者による評価もハッピーエンドであった。

Figure 2 に示した非ハッピーエンドの童話では、主人公は設定されていない。起承転結の「起」となる 1 枚目 (左上) では「タコがエサである魚を追いかけしている場面」が描かれている。次に 2 枚目 (右上) において「魚を追いかけていたタコが逆にエサとして追いかけている」。3 枚目 (左下) において、「タコはサメに食べられてしまうが、そのサメの背後にはもう一匹がやってきており」、4 枚目 (右下) で、「タコを食べたサメもクジラによって食べられてしまい」、非ハッピーエンドの結末となった。また、PDI での参加者による評価も非ハッピーエンドであった。

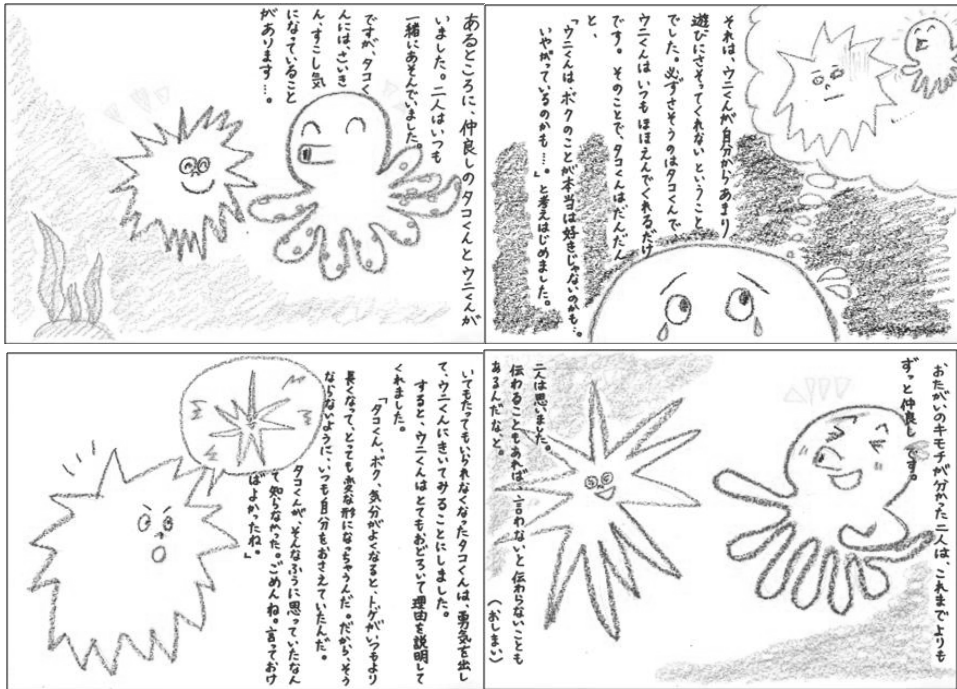


Figure 1. ハッピーエンド群の童話例

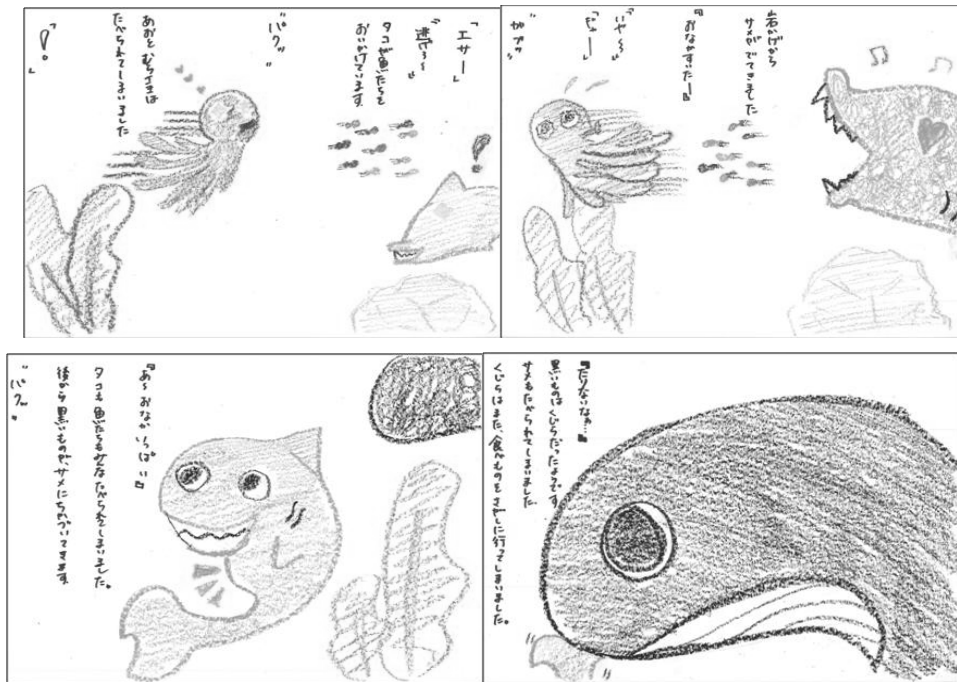


Figure 2. 非ハッピーエンド群の童話例

Table 2
各群および性別ごとの度数

	ハッピーエンド群	非ハッピーエンド群
男性	17	11
女性	24	8
合計	41	19

多面的感情状態尺度について 尺度の信頼性について検討を行なった。寺崎ら（1991）の因子構造に従い、抑うつ・不安、敵意、倦怠、活動的快、非活動的快、親和、集中、驚愕の8因子それぞれのクロンバックの α 係数を算出した。全ての因子において α 係数が0.65以上であり、信頼できる尺度であった。次に、因子ごとに平均値と標準偏差を算出した（Table 3）。敵意と驚愕の2因子において平均値－標準偏差がMMS短縮版においてとりうる最低値である5以下となっており、床効果が見られた。したがって、敵意と驚愕の2因子を除いて分散分析を行なった。

Table 3
条件ごとの各因子得点の平均値（SD）

	時期 結末 性別	実施前				実施後			
		ハッピーエンド群		非ハッピーエンド群		ハッピーエンド群		非ハッピーエンド群	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
抑うつ・不安		10.94 (3.63)	11.88 (3.72)	9.73 (2.15)	9.63 (2.62)	9.12 (2.91)	9.25 (3.42)	8.82 (2.75)	8.88 (3.98)
敵意		6.35 (2.06)	5.88 (1.90)	6.00 (1.55)	6.50 (2.78)	5.53 (1.07)	5.50 (1.02)	6.45 (3.08)	5.88 (1.73)
倦怠		10.18 (2.43)	10.08 (2.38)	10.73 (2.15)	10.00 (2.45)	8.35 (2.45)	8.58 (2.15)	9.82 (2.86)	8.88 (2.75)
活動的快		11.41 (3.08)	10.54 (2.47)	9.82 (2.64)	10.25 (3.28)	13.24 (3.72)	11.46 (2.92)	9.18 (2.44)	10.13 (3.72)
非活動的快		14.18 (3.75)	13.58 (2.84)	13.27 (2.76)	13.63 (3.07)	14.59 (3.52)	13.63 (2.81)	12.82 (3.52)	14.13 (4.55)
親和		10.18 (3.86)	8.71 (2.61)	6.82 (2.18)	8.88 (3.76)	11.65 (4.24)	10.38 (3.32)	8.27 (3.38)	10.75 (4.62)
集中		12.00 (3.04)	12.29 (2.44)	12.00 (2.79)	9.88 (3.87)	11.47 (2.37)	10.96 (4.24)	10.18 (3.40)	10.25 (3.58)
驚愕		6.53 (1.66)	7.83 (2.43)	6.73 (2.20)	7.25 (3.15)	6.59 (1.84)	7.17 (3.09)	6.55 (2.98)	7.00 (2.39)

分散分析結果 寺崎ら（1991）と同様の因子構造を用いて分散分析を行なった。抑うつ・不安因子において時期要因の主効果が有意（ $F(1, 56) = 16.49, p < .001$ ）であり、実施前より実施後において有意に低かった。また、時期要因と結末要因の交互作用において有意傾向が見られた（ $F(1, 56) = 3.44, p < .10$ ）。交互作用が見られたため単純主効果の検定を行なったところ、実施前において結末要因の単純主効果が有意傾向（ $F(1, 56) = 3.41, p < .10$ ）であり、ハッピーエンド群より非ハッピーエンド群の方が有意に低かった。また、ハッピーエンド群において時期要因の単純主効果が有意（ $F(1, 56) = 27.54, p < .001$ ）であり、ハッピーエンド群において実施前より実施後の方が有意に低かった。なお、性別に関する主効果や交互作用は見られなかった。すなわち、性別に関わりなく、ハッピーエンド群では実施前より実施後の方が抑うつ・不安は低くなったと言える。また、性別に関わりなく、ハッピーエンド群は非ハッピーエンド群に比べ、実施前における抑うつ・不安が高い傾向にあると言える。

倦怠因子において時期の主効果が有意であった（ $F(1, 56) = 13.65, p < .01$ ）。実施前より実施後の方が有意に低くなった。交互作用は見られなかった。すなわち、性別、結末に関わりなく、実施前より実施後の方が倦怠は低くなったと言える。

活動的快因子において結末の主効果が有意であった（ $F(1, 56) = 5.71, p < .05$ ）。非ハッピーエンド群よりハッピーエンド群の方が有意に高かった。また、時期と結末の交互作用が有意であった（ $F(1, 56) = 5.69, p < .05$ ）。交互作用が見られたため、単純主効果の検定を行なったところ、実施後において結末の単純主効果が有意であった（ $F(1, 56) = 8.96, p < .01$ ）。実施後において、非ハッピーエンド群よりハッピーエンド群の方が有意に高かった。ハッピーエンド群において時期の単純主効果が有意であった（ $F(1, 56) = 10.96, p < .01$ ）。ハッピーエンド群において実施前より実施後の方が有意に高かった。性別に関する主効果、交互作用はみられなかった。すなわち、性別に関わらず、ハッピーエンド群では実施前より実施後で活動的快が高くなり、また実施後において非ハッピーエンド群よりハッピーエンド群の方が高くなったと言える。

非活動的快因子において有意差は見られなかった。

親和因子において時期の主効果が有意であり（ $F(1, 56) = 22.90, p < .001$ ）、結末の主効果が有意傾向（ $F(1, 56) = 2.86, p < .10$ ）であった。また、結末と性別の交互作用が有意傾向であった（ $F(1, 56) = 3.95, p < .10$ ）。交互作用が見られたため、単純主効果の検定を行なったところ、男性において結末の単純主効果が有意であった（ $F(1, 56) = 7.15, p < .05$ ）。すなわち、性別、結末に関わりなく実施前より実施後の方が、親和が高くなると言える。ただし、男性においてのみ非ハッピーエンド群よりハッピーエンド群の方が、実施前後どちらの時点においても親和が高かったと言える。

集中因子において時期の主効果が有意であった（ $F(1, 56) = 4.45, p < .05$ ）。また、時期と性別と結末の交互作用が有意傾向であった（ $F(1, 56) = 3.65, p < .10$ ）。交互作用が見られたため、単純主効果の検定を行なったところ、女性において実施前のときに、結末の単純主効果が有意であった（ $F(1, 56) = 4.20, p < .05$ ）。男性において非ハッピーエンド群のときで、時期の単純主効果が有意であった（ $F(1, 56) = 4.68, p < .05$ ）。女性においてハッピーエンド群での時期の単純主効果

が有意であった ($F(1, 56) = 5.49, p < .05$)。すなわち、女性では実施前において、非ハッピーエンド群よりハッピーエンド群の方が集中は高く、また女性のハッピーエンド群では、実施前より実施後において集中が低くなったと言える。また、男性の非ハッピーエンド群では実施前より実施後において集中が低くなったと言える。

考察

MMS 短縮版の各因子における分散分析結果の考察 抑うつ・不安因子では、性別に関わらず、ハッピーエンド群において抑うつや不安が実施前より実施後で低くなった。このことから、童話療法は否定的感情状態である抑うつや不安を低減させるというポジティブな効果を持つと考えられ、また男性においても女性同様に感情変容効果が生じることが明らかになった。ただし、時期と結末の交互作用が見られることから、この効果は結末がハッピーエンドである場合に限られたものであると考えられる。また、性別に関わりなく、ハッピーエンド群は非ハッピーエンド群に比べ、実施前において抑うつ・不安が高い傾向にあった。これは、抑うつや不安が高い参加者がハッピーエンドの童話を作成したと考えられる。

倦怠因子では、性別や結末に関わりなく、倦怠が実施前より実施後の方が低くなった。このことから、童話療法は否定的感情状態である倦怠感を低減させるというポジティブな効果を持つと考えられる。

活動的快因子では、性別に関わらず、ハッピーエンド群において活動的快が実施前より実施後で高くなった。活動的快は、Labo (1978) のenergyに対応しており、「活気のある」、「気力にみちた」、「元気いっぱい」、「はつらつとした」、「陽気な」の5項目から成る。このことから、童話療法は肯定的感情状態である活力を増加させるというポジティブな効果を持つと考えられ、また男性においても女性同様に感情変容効果が生じることが明らかになった。ただし、時期と結末の交互作用が見られていることから、この効果は結末がハッピーエンドであるかどうかによって異なると考えられる。

非活動的快因子では、有意差はみられなかった。非活動的快因子は「のんびりした」、「おっとりした」、「ゆっくりした」、「のどかな」、「のんきな」の5項目で構成されており、リラックスに関わる因子である。また、寺崎・岸本・古賀 (1992) によると快感情は覚醒の高低により活動的快、非活動的快に分けられているという。すなわち、覚醒水準の高い快感情である活動的快と、覚醒水準の低い快感情である非活動的快は異なる覚醒水準であるため、同時に増加しにくいと考えられる。よって、童話療法において活動的快が増加していたことから、非活動的快は増加しなかったと考えられる。

親和因子では、性別、親和感情が結末に関わりなく実施前より実施後の方が、高くなった。このことから、童話療法は肯定的感情状態である親和感情を増加させるというポジティブな効果を持つと考えられ、また男性においても女性同様に感情変容効果が生じることが明らかとなった。しかし、結末と性別の交互作用がみられ、男性においては非ハッピーエンド群よりハッピーエンド群の方が

実施前後ともに親和感情が高かった。親和因子は「恋しい」, 「いとおいしい」, 「好きな」, 「愛らしい」, 「すてきな」の5項目で構成されており、Lebo (1978) で見出された感情因子のsocial affectionと対応している(寺崎ら, 1992) ことから、これは家族や子ども、親しい人に対する親愛感情であると考えられ、男性はより具体的に読ませる対象を想定して童話を作成したことが考えられる。また実際に、男性の本調査への感想の中で「子どもに読ませることを想像した」といった感想が複数得られており、ハッピーエンド群の男性は子どもに読ませることをより意識して童話を作成したため、ハッピーエンドの童話を作成したことも考えられる。童話作成中の内省についてさらに詳しく参加者にたずねるなど、童話療法における親和の意味について検討していく必要がある。

集中因子では男性の非ハッピーエンド群、また女性のハッピーエンド群において、実施前に集中が高く、実施後に集中が下がった。この結果は、古賀ら(1991)の、試験前に集中が上がり、試験後に下がるという結果と一致しているが、男性のハッピーエンド群、女性の非ハッピーエンド群では見られなかった。集中は、神経症的傾向や不安因子の性格特性が関連しているという知見(東山・丹羽, 2003)があることから、抑うつ・不安因子との関連があると考えられる。

なお、敵意因子、驚愕因子において床効果がみられた。敵意や驚愕感情は、健常な大学生を対象とした調査であったため、生じにくかったものと考えられる。

本研究の成果 本研究では童話療法の感情変容効果について多面的感情状態尺度を用いて検討し、男子大学生にも女子学生同様に感情変容効果が生じるかどうかを検討した。その結果、女性大学生だけでなく男子大学生においても抑うつや不安、倦怠感が低減し、活気、親和感情が増加するというポジティブな感情変容効果が示された。ただし、この感情変容効果は結末の違いによって異なることが明らかとなった。加えて、本研究では非活動的快において男女ともに有意な差は見られず、童話療法におけるリラクゼーション効果は見られなかったと言える。よって童話療法は、リラクゼーションを目的というよりは、抑うつ傾向の人など、活動性が低下している人に用いることで効果が得られると考えられる。

次に、実施前後の気分や感情の変化と結末のあり方との関連について検討した。ハッピーエンド群の抑うつ・不安、倦怠、活動的快、親和の因子においてポジティブな効果が見られた。これは蘭(2007)によって示されたハッピーエンドが快感情につながるという知見と一致しており、ハッピーエンドの童話を作成することによりポジティブな感情変化を得られたと言える。ただし、非ハッピーエンドの童話についてポジティブな効果を得ることができないわけではなく、ハッピーエンドの童話より少ない因子においてではあるが、倦怠感の低減や親和感情の増加というポジティブな効果が得られている。

今後の課題 本研究では、男子大学生においても女子大学生同様に童話療法による感情変容効果が見られるかについて検討を行なった。しかし、親和因子および集中因子において性差が見られた。今後の研究において、男子大学生と女子大学生における童話作成体験の違いなどを聴取することにより、性差が生じた理由についてさらに検討する必要がある。

また、本研究では童話の内容や描画特徴については検討しなかったが、実際に作成された童話にはそれぞれ個性が表れており、童話の作成は療法としての働きのみではなく投映法としての働きも

持っていると考えられる。加えて、本研究では感情にのみ着目したが、パーソナリティとの関連が示唆されたため、パーソナリティの指標を用いるなどして、作成された童話の描画特徴や物語と、性格や心理状態との関連を見ていくことも必要である。

引用文献

- 蘭香代子 (2007) . 童話作成に及ぼす心理特性—童話研究 (2) — 駒沢女子大学研究紀要, **14**, 1-11.
- 蘭香代子 (2008a) . 童話療法 誠信書房
- 蘭香代子 (2008b) . 童話作成に内在する心理機能の因子分析的研究—童話研究 (6) — 駒沢学園心理相談センター紀要, **5**, 2-5.
- 蘭香代子 (2009) . 制作方法が影響する童話療法効果について—童話研究 (8) — 駒沢女子大学研究紀要, **16**, 7-15.
- 東山明子・丹羽劭昭 (2003) . 顕在性不安と注意集中パフォーマンス時の生理心理現象 日本体育学会号, **54**, 299.
- 古賀愛人・寺崎正治・岸本陽一 (1991) . 多面的感情状態尺度の妥当性の検討 日本心理学会第 55 回大会発表論文集, 434.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1991) . 多面的感情状態尺度・短縮版の作成 日本心理学会第 55 回大会発表論文集, 435.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1992) . 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356.
- 鳥丸佐知子 (2004) . あいまい状況における物語作成が感情誘発と情報処理に及ぼす影響—抑うつ傾向の差を指標として 感情心理学研究, **11** (1), 1-12.